

東洋紡株式会社 2026 年度 第 1 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2026 年 8 月 7 日（金）10:00～11:00

場所：WEB 形式

登壇者：執行役員 CFO 管理部門統括 高橋 秀和

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：価格転嫁の進捗と今後の見通しは？

A：包装用フィルムを中心に価格改定は概ね進展している。中東情勢に起因する原燃料コスト上昇分については、今後も価格転嫁を継続していく方針である。一方、ライフサイエンスなど価格改定が難しい分野もある。

Q：通期計画においてフィルム事業を慎重に見ている理由は？

A：包装用フィルムについては、食品価格高騰の影響を受け、食品向け需要の荷動きが年後半にかけて鈍化すると見ている。また、中東情勢に起因する原燃料価格上昇については、製造から販売まで一定期間を要するため、第 1 四半期では影響が限定的である一方、年度後半にかけて売上原価の上昇として反映される見込みである。加えて、原燃料価格動向など外部環境の不確実性も考慮し、慎重な前提を置いている。

Q：中東情勢による数量影響をどのように見ているか？

A：第 1 四半期は中東向け売上高に一定の影響があったものの、今後は段階的な正常化を想定している。ただし、海水淡水化逆浸透膜（RO 膜）など事業によって回復スピードは異なるため、事業ごとの状況を注視している。

Q：SRF および MLCC 用途のフィルム事業の状況は？

A：SRF、MLCC 用途とも需要は堅調に推移している。SRF はフル生産・フル販売の状況が継続しており、MLCC 用途も宇都宮工場の増強効果により数量が増加している。高機能フィルム分野は引き続き成長が期待される。

Q：ライフサイエンス事業の回復見通しは？

A：透析膜の新工場は実生産を開始しており、歩留まり改善など生産性向上に取り組んでいる。医薬品製造受託事業では、設備更新に伴う償却負担が先行している一方、新規受託案件の獲得に向けた試験・試作が進んでいる。バイオ事業は培養設備の増強により販売を順調に拡大している。年度後半にかけて数量増加による収益改善を見込んでいる。

Q：環境・機能材の下期見通しは？

A：足元の需要は概ね堅調に推移している。前年度下期は例年と比べて季節要因などの影響が強く収益を押し上げたが、今期はそうした要因を見込んでいない。また、今後、動力費、原材料コスト上昇の影響が徐々に顕在化することも織り込んでいる。

Q：エアバッグ事業の構造改革進捗は？

A：中国拠点の譲渡、北米拠点の解散、タイ拠点への集約を進めており、事業構造改革は計画通り進展している。生産性改善や販売拡大の効果も現れており、下期の黒字化に目処が立っている。

以上